

イギリスのロングウィル学校 (Longwill School, for the Deaf), トーマソン記念学校 (Thomasson Memorial School, for the Daef) 及び バーミンガム (Birmingham) 教育委員会の調査訪問について

藤 本 裕 人

(企画部)

要旨: 障害のある子どもの教育経費面に焦点をあてて、イギリスの特別学校 (聾学校) と地方教育委員会に対して訪問調査を行った。教育経費の積算内容の考え方や、行政から支給される一定の学校運営費の中での教員採用システムなどが分かった。また教育内容について、訪問した聾学校では、学校評価、個別教育計画 (IEP) と学力評価、口話 (Oral) ・手話 (Sign) の学級編制が確認できた。

キーワード: 障害のある子どもの教育経費 評価 コミュニケーション

1 はじめに

本稿は平成17・18年度の科学研究 (萌芽研究) 「我が国の障害児教育の経費策定と評価に関する研究」の一環として、海外での障害のある子どもの教育経費を調べるため、イギリスの特別学校と教育委員会を訪問した際、そこで得られた学校状況や情報を整理したものである。

2 Birmingham [LONGWILL SCHOOL]

訪問期日は平成18 (2006) 年2月22日である。イギリスの学校はこの時期に2週間程度の休業期間を設けるのが通例であるが、LONGWILL SCHOOLでは、授業が行われていた。この学校は、Northfield, Birminghamにある2歳から12歳までの公立の聾学校である。日常の学習指導場面でのコミュニケーション手段は、聴覚口話と手話の双方を用いて指導が行われていた。

管轄はBirminghamの教育委員会 (LEA) であり、日本の聾学校の概念で表現するなら、幼稚部と小学部が設置されている聾学校と言える。LONGWILL SCHOOLに関する学校評価報告書であるINSPECTION REPORT¹⁾では、幼児児童の個々の目標達成について表1のような評価が公表されていた。

3 学校の教育内容

(1) 学校のイメージと設備

日本の聾学校のイメージと比較した印象では、非常にカラフルで木質の教材がたくさんあるイメージが第一印象で

表1 個々の目標達成についての評価の例

| Progress in: | by age 5 | by age 11 |
|--|----------|-----------|
| Speaking and listening | B | A |
| Reading | C | B |
| Writing | C | C |
| Mathematics | B | B |
| Personal, social and health sducation | B | B |
| Other personal targets set at annual reviews or in IEPs* | B | B |

key: very good 「A」, good 「B」, satisfactory 「C」
unsatisfactory 「D」, poor 「E」

ある。また、在籍幼児児童は、イギリスの植民地政策の歴史を反映してか、アフリカやアラブ系の子どもの多くも在籍していることが分かった。日本で関心の高い「手話」か「聴覚口話」かというコミュニケーションに関する問題以前に、「生まれた国の母国語」と「英語」の習得というバイリンガルの課題が存在していた。

教室の設備では、ほとんどの教室で、天井のプロジェクターから投影される電子黒板があるほか、教室の後壁にスピーカーは設置されており、音圧は、教室内で教師の声が安定して届くような調整が行われていた (図1)。授業における視覚情報提示や音響設備面では、興味深い設備が随所に見られた。

幼児クラスでは、遊びを中心とした指導の他、電子黒板を活用した視覚教材での授業が行われていた (図2)。教師のコンピュータで作成した教材が、電子黒板に投影されると同時に、教師が電子黒板を触ると書き込みや画面入力ができるものであった。タッチスクリーンの機能が付加さ



図1 天井からのプロジェクターと壁スピーカー



図3 小学部の発音指導場面



図2 電子黒板を活用した授業(幼稚部)

れているようである。幼児への説明場面では、電子黒板に、補足の書き込みを行いながら授業が行われていた。

遊びの時間には補助員(教員ではない)が子どもの遊びに対応していた。幼児児童に関わる大人は、教員、補助教員、保育補助員、給食時の補助員、学校心理士など多様である。また、教材作成担当の専門の方も職員として活動されている説明を受けた。日本では、教員以外の職種については、なかなか概念として捉えにくいところであるが、総体として、多くの大人が子どもに接し関係していることや、職種によって賃金体系が異なる(補助の方の賃金は教員の半分程度になるそうである)方が働くことによって、学校の運営費の工夫が可能になる背景が推察された。

(2) 小学部の授業の様子

小学部では、伝統的な発音指導が行われていた。文字と口形を一致させ、正しい発音に導く方法である。振動感覚や皮膚感覚をフィードバックさせる方法ではなく、人工内耳や補聴器を介して音声の模倣を促し、個別の発声練習とクラス全員で一斉に発声を促すという方法が採られていた

(図3)。専門の教員が中心になって指導を行い、補助員がそばについて、児童に復唱を促していた。

高学年の算数の授業(図4)では、専門の資格を有する教員が、授業を行っていた。机の形態は、「コ」の字型で、全員座れば8人程度になる座席が用意されていた。教員のコミュニケーション手段は、「英語の音声」と「手話」を同時に使用しての授業である。見学の時の内容は、足し算の文章題であった。児童の机上には、電卓が置いてあり、計算技術よりも、文章題の内容を理解するところに、時間をさいて説明が行われていた。

音楽について、尋ねたところ、音楽の時間は設定されておらず『ドラマ』の時間が設けられており、今は「冬から春にかけて、植物の芽が伸びてくる様子」の身体表現に取り組んでいるとのことであった。また、『ドラマ』の身体表現の活動は、近くの小学校に出向いて、一緒に教育活動を行うとのことであった。日本で言う「交流および共同学習」の活動が行われていた。



図4 高学年(10~11歳クラス)

(3) 評価

児童の学習評価については、IEPの評価だけでなく、学力についても把握が行われていた。その記録は、縦断的学習段階記録グラフ（HAFグラフ）に記録されていた。IEPの評価とイギリスのカリキュラムの初期レベルの学力検査が記録できるようになっている。筆者は障害のある子どもの学力について、日本でどのように評価するか、課題意識があり、この記録方法は示唆のある評価方法に感じられた。HAFは、特別学校の校長先生らが考案し作成されたことの説明を受けた。

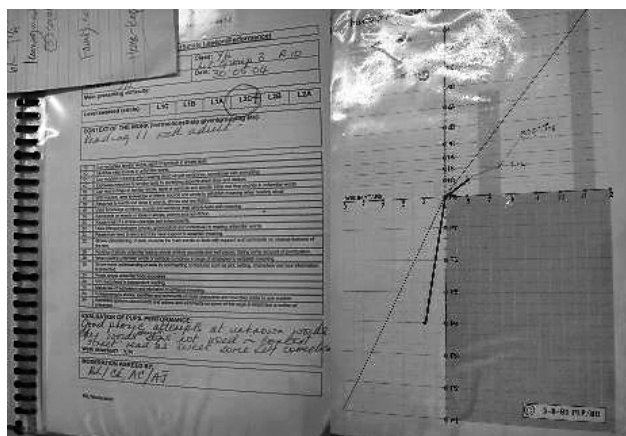


図5 IEPの評価とHAFグラフ

4 児童生徒一人当たりの経費について

日本では、児童生徒に掛かる教育経費は、文部科学省が教育施策の基礎資料を得ることを目的とした「地方教育費調査」が実施されており、会計年度に沿った報告書で経費の

把握を行うことができるが、イギリスにおける障害のある子どもの経費情報は、公開されておらず把握が困難であった。

そのため、①教員数、②在籍者数、③学校運営経費の把握を行うことで、概算として、障害のある子どもの教育経費を求めることとした。

学校長へのヒヤリング調査では、教育費の概念の共通理解を行うため、最初に日本の教員配置の基準について、説明した。（表2）日本では、在籍者数で学級数が決まり、その学級数に対して国から教員の定数配置がおこなわれることについて説明したところ「確実に教員が配置されるシステムは、合理的である」との感想をもらった。教員定数や学級編成基準の考え方が異なる場合、教育経費をどのように解釈するか難しいところである。

イギリスでは教員の配置については、学校長が募集をかけて採用するため、在籍数に対して教員を配置するという日本の方法とは事情が異なる。学校長が行政からの学校運営費の範囲内で、教員採用を決め経営を工夫するシステムが採られているとのことであった。年間で約1000万ポンドの経費で学校運営していること、そして約20名の子どもが教育を受けている旨の説明を受けた。日本円では、子ども一人当たり約1200万円程度（1ポンド約240円計算）の経費を要していることが分かった。

5 ボルトン(Bolton)のトーマソン記念学校(Thomasson Memorial School, for the Daef)

訪問期日は、平成19年2月21日である。小学部と幼稚園設置の公立の聾学校である。春期休業中のため、児童生

表2 Class organization standard of Japan

| | | |
|--|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> Elementary school An ordinary class 6-12 years old | <ul style="list-style-type: none"> Lower Secondary school An ordinary class 13-15 years old | <ul style="list-style-type: none"> School for the Blind School for the Deaf Special school (Intellectual Disability) (Physical/Motor Disability) (Health Impairments) 6-12, 13-15, 16-18 years old |
| Class organization standard | Class organization standard | Class organization standard |
| <ul style="list-style-type: none"> 1-40 persons ; children One teacher | <ul style="list-style-type: none"> 1-40 persons ; student One teacher | <ul style="list-style-type: none"> Single Disability 6-12, 13-15 years old 1-6 persons ; child, student One teacher |
| The class organization standard of a special class | The class organization standard of a special class | Two or more Disability |
| <ul style="list-style-type: none"> 1-8 persons ; children One teacher | <ul style="list-style-type: none"> 1-8 persons students One teacher | <ul style="list-style-type: none"> 6-15 years old 1-3 persons ; child, student One teacher |



図6 Thomasson Memorial School



図7 SSE (Sign-Supported-English クラス高学年)

表3 クラスの構成とコミュニケーション

| 幼稚園のクラス3～4歳 | |
|--------------------|----------------|
| 4～5歳のナーサリークラス | OralとSignのミックス |
| 小学部5～7歳 (year1&2) | Oral 1 |
| 小学部5～7歳 (year1&2) | Sign 1 |
| 小学部7～9歳 (year3&4) | Oral 2 |
| 小学部7～9歳 (year3&4) | Sign 2 |
| 小学部9～11歳 (year5&6) | Oral 3 |
| 小学部9～11歳 (year5&6) | Sign 3 |



図8 口話の学級1 (Oralクラス 低学年)

徒は休業中であった。そのため、施設見学と学校運営経費について校長先生と話をすることとなった。Borutonの駅から車で約15程度走った後、静かな市街地の中に、「Deaf children」の道路標識が見えてきた。

小学部の学級は、聴覚口話クラスと手話クラスに分けられており、それぞれ、年齢に対応して3つの学級が設けられていた。校長先生の説明によれば、イギリスの聾学校の中で「聴覚口話」と「手話」の両方を行っている聾学校は少ないとのことであった。教員の構成は、校長、教頭、8人の聾教育専門の教員（各クラス）、聾の先生（Deaf Instructor、聾専門の免許はないが、モデル（Role Model）の先生で手話（Sign）を使う子どもの学びを手助けする）、8人の補助教員（Teaching Assistant）、自閉症の生徒に付き添っている補助員1名、重度の身体障害のある児童に付き添っている補助員1名、その他、事務、給食、掃除のスタッフで構成されている。そのほかに、Boltonの小学校にメインストリームしている子どもや、小学校の障害ユニット（Unit）の巡回指導教員スタッフが50名仕事をしている。聾学校が聾教育のサポートセンターの役割をはたしているとのことであった。巡回指導では、補聴器の具合を見たり、授業が理解できているか、小学校の担任の教員

が、コミュニケーションの手助けの仕方が分かっているか、学習の進展具合などを見たりするそうである。

5～11歳の小学部年齢の児童が48人在籍、幼稚園3～4歳クラスは午前20人、午後20人通ってきている。学級編成の構成とコミュニケーション手段の関係は表3のとおりである。

コミュニケーション手段について質問したところ、親の希望は様々で、口話（Oral）のクラスの子どもは、Oralと手話（Sign）の両方を行う。SignのクラスはSignを主に行う。親が聾の方は子どもにSignを習わせたいと思われているけれど、子どもは、Signはできるが、OralもできるようになってOralのクラスに移る子どももいるそうである。コミュニケーションができることが一番大事で、それがOralがSignであるかの違いであると説明を受けた。

Boltonでは、メインストリームの学校（Mainstream School）を特別学校（Special School）の隣に建てることになっており、子どもの力に応じて、隣の小学校の授業に参加したり、小学校の子どもが聾学校に遊びに来たり手話を習いに来たりすることがあるようだ。

1980年代に、イギリスでは、インクルージョンが進む



図9 教室の様子と児童用電子タブレット

中で、多くの聾学校（私立）が閉校し、現在では、聴覚障害のある子どもの約8割が通常の学校に在籍して学習を受け、約2割が聾学校で学習しているとのことであった。

(2) 学校の設備

校舎は2階建ての質素な学校であるが、随所に、「経験から言語を増やす壁面」、「やりとりができる遊びコーナー」、が設けられている他、児童用の電子タブレット、重低音の音響設備を備えた発表の舞台があるプレイルームなどが特に目を引いた。また、各教室には、子どもの活動を撮影するデジタルカメラが設置されており、いつでも子どもの様子を撮影することができるようになっていた。各教室のデジカメは、学校評価の報告書を作成する際、子どもの生き生きとした活動を写すためのものである。文章で説明するよりは画像で説明した方が説得力があるので、各教室にデジタルカメラを置いて使用しているそうである。

今回は、児童とは、直接会話することができなかったが、学芸会の劇のDVDを見せていただいた。身体表現と音声を使ってピーターパンの劇に取り組んでいた。廊下の壁面（図10）からは、「体験や経験から言語力を広げる」という、ハイキングに行った時の経験をもとに「単語」が掲示されている。「水門」「(川の)浸食」「砂利」などの文字カードが張られた壁面からは、聾学校らしい言語概念を広げようとする活動を垣間見た思いがした。

教室の壁面教材（図11）では、似通ったアルファベット表記の単語を丁寧に掲示し、違う意味があることが分かるような工夫が見られた。英語圏での書き言葉を習得する際の工夫と推察された。

(3) 学校の運営経費について

学校にかかる経費について、日本の教育経費の概念を説明（表4）し、イギリスの学校運営経費について、説明を受けた。日本では①人件費、②教育活動費、③管理費、④



図10 ハイキングの様子の壁面



図11 表記の似通った単語学習の壁面

表4 日本の教育経費の概念

| The items of cost of special education (2003) (the case of Japan) |
|--|
| Consumption expenditure |
| - Personnel expenses A teacher, office work, a dormitory, care, etc. |
| - Educational activity expense A textbook, teaching tools (a crayon, chalk, origami, medicine for an experiment), etc. |
| - Administrative expenses Repairing cost (the supplement of a lawn, lobbying of a play ground, repair of a windowpane) etc. |
| - Auxiliary activity expense The expense of a medical check up, the operational expenses of supply of food, etc. |
| - Predetermined amount payable Fire insurance, the rental of a building, etc. |
| Capital expenditure |
| - Land expense |
| - Building expenses |
| - Equipment, fixtures expense |
| - Books buying expenses |

補助活動費，⑤所定支払費，⑥土地費，⑦建築費，⑧設備・備品費，⑨図書購入費等が教育費に関係してくるが，トーマソン記念学校では，①人件費，②教育支援関連（教育委員会の支援サービスを活用する料金），③必要経費（ガス代金，掃除等），④教育活動費（プール使用料，給食等），またそれ以外に評議委員会の費用があることが分かった。

6 バーミンガム教育委員会への訪問

今回の調査では，障害のある子どもの具体的な経費についての情報を得るために，バーミンガム教育委員会を訪問した。そこでは，前述の表2，表4をもとに，日本の学級編制基準と経費の概要について説明を行った。その後に，概念の整理をしてイギリス（バーミンガム）の教育経費について，質問を行った。



図12 バーミンガム LEA (教育委員会)

所長さんの説明では，例えば聾学校に月曜日から金曜日まで通う子どもの場合，年間約20,000ポンド（約480万円）程度経費がかかること，また，寄宿舎で生活するような場合は，約50,000ポンド（約1,200万円）という説明を受けた。日本の「地方教育費調査」のような統計資料がないため，障害のある子ども一人当たりの教育費を把握することが，難しい状況があることが分かった。



図13 バーミンガム教育委員会が作成したインクルーシブ教育（盲・聾）の支援手引きDVD

次に，小学校・中学校の教育費と，通級等（resource base）の障害のある子ども教育の経費について，尋ねたところ，経費を担当する方と連絡を取っていただき，電話での聴取ということでその内容を表5に整理した。（1ポンドを240円で計算を行っている。）

表5 イギリス（バーミンガム）における教育経費について

| 学校種別 | 教育費（一人当たりの平均） | 特別の追加費用（一人当たり） | 合計 |
|---|--|--------------------------|--|
| Primary (小学校) | £ 3,239 約78万円 | | £ 3,239 約78万円 |
| Secondary (中学校) | £ 4,008 約96万円 | | £ 3,239 約96万 |
| Primary (resource base) (小学校 リソース活用) | £ 3,239 約78万円 | £ 14,846 (支援等) 約356万 | £ 18,085 (通常+支援) 約434万円 |
| Secondary (resource base) (中学校 リソース活用) | £ 4,008 約96万円 | £ 10,278 (支援等) 約257万円 | £ 14,286 (通常+支援) 約343万円 |
| Special school (primary and secondary) 特別学校 (小学部と中学部) | £ 14,708 (range £5,000 to £30,000) 約353万円 (個人差があり，重複等の場合は約720万円ぐらいの場合がある。寄宿舎があると更に経費はかかる。) | | £ 14,708 約353万円 (約120～720万円と個人によって幅がある。) |

7 おわりに

イギリスの特別学校（聾学校）及び教育委員会の訪問調査で経費の情報収集に努め、特別学校に在籍する児童生徒に要する教育経費は、寄宿舎を使用しているか、重複障害であるか等の条件によって、約350万円から1,200万円と幅があることが分かった。

また、小学校で教育支援（リソースの活用）を受けている障害のある児童に要する経費は、通常の小学校の教育経費（約78万円）に加えて、約356万円がさらに必要となり、合計約434万円という状況であった。子どものケースによっては、特別学校と同程度の経費で対応されていることになる。バーミンガムで実施されているインクルーシブ教育は、一人ひとりの子どもに対して、かなりの経費をかけて展開されていることが分かった。

さらに、学校評価、学習評価の面では、今の日本よりもより明確に指標を使う評価が行われていることが分かった。また、教育委員会で、視覚障害・聴覚障害の児童生徒

に焦点を当てたインクルーシブな教育への配慮事項をまとめたDVD（図13）が作成されていたことなど、行政として対応していかなければならない参考となる状況を垣間見ることができた。

附記

本稿は、「我が国の障害児教育の経費策定と評価に関する研究」（平成17～18年度科学研究補助金萌芽研究）の一環で実施した訪問調査で得られたイギリスの学校の状況を整理したものである。科学研究の研究分担者である国立特別支援教育総合研究所研修情報部主任研究員の横尾俊氏、並びにバーミンガム大学国際教育研究所の山下博美先生に深く御礼を申し上げます。

文献

- 1) INSPECTION REPORT, 「LONGWILL SCHOOL」, Insupection number : 196323, Dates of inspection : 9th – 12th July, 2001

Report on research visits to Longwill School for the Deaf and Thomasson Memorial School for the Deaf, Birmingham Educational Authority

Hiroto Fujimoto

(Department of Policy and Planning)

Summary

I made research visits to special schools (schools for the deaf) and a Local Educational Authority in the United Kingdom to learn more about educational costs for children with disabilities. From these visits I gained an understanding of attitudes toward measuring educational costs and systems used for hiring teachers within the fixed school management budget provided by the government. With regard to educational contents, I confirmed that classes are operated based on school assessment, individual education plan (IEP), academic assessment and oral/sign communication at schools for the deaf that I visited.

Keywords: Educational costs for children with disabilities, Assessment, Communication